

「形式の段階付け」の再検討

—丁寧さを測るクライテリアの調整にむけて—

阿部 貴人
国立国語研究所

1. はじめに

人は、何らかの発話を聞いたとき、その発話がどの程度丁寧であるかを瞬時に判断する。そのとき、人はどのような「基準」に照らして、敬意の度合いを判断しているのだろうか。

敬語に関わる現象をみつめるということ — ひいては待遇表現、敬意表現、配慮表現を観察し、その様相と仕組みを把握しようとする — は、すなわち、この「基準」を探ることであると言い換えることができる。

昭和 28 (1953) 年、国立国語研究所は、この「基準」を探り、敬語使用とその意識に関わる法則・メカニズムを明らかにすることを目的として、大規模な調査を実施した。愛知県岡崎市における調査研究である。敬調 53 と呼ばれる第一次岡崎調査（以下、第一次調査と称す）によって、上記の命題を明らかにした（国立国語研究所 1958）。

昭和 47 (1972) 年、約 20 年の歳月を経て、敬語使用とその意識自体が、またその法則とメカニズムがどのように変化したのかを探るために、同市において、2 回目の調査を実施した。敬調 72 と呼ばれる第二次岡崎調査（以下、第二次調査と称す）である。第一次調査との比較に主眼をおいた結果を、国立国語研究所（1983）にまとめた。

そして平成 20 (2008) 年、第一次調査から 50 年以上の月日が流れ、21 世紀を迎えた今、上記の命題に再び取り組み、半世紀にわたる敬語の変化をみつめる第三次岡崎調査を実施した（以下、第三次調査と称す）。

第一次調査、第二次調査において、「基準」を探るために、そして法則・メカニズムを明らかにするために、分析の中心的な役割を果たした手法が「形式の段階付け」である。過去 2 回の結果をまとめた報告書にもあるように、これまでの岡崎調査の「骨」と言ってよい。

この手法を今回も採用するか否かは慎重に検討されなければならない。過去の「基準」が、現代の敬語をみつめるうえで、過不足なく適合し得るものだとは限らないからである。あるいは、敬語使用のパラダイム自体が大きく変容しているかもしれないからである。しかしながら、逆説的に言えば、この手法が適合するか否かを見極めること自体が、半世紀にわたる敬語の変化を探ることになるのである。

本発表は、過去の「形式の段階付け」が、現代の敬語をみつめる手法と成り得るか否かを検討することを目的とする。

以下では、まず「形式の段階付け」を概観し、その目的・意義を確認する (§2.)。次に、この手法を今後も採用するうえでの課題を挙げ、その課題についての解決策を示す (§3.)。

また、§3.で示した解決策について行った実験結果を示し、現時点での「形式の段階付け」の「基準」の修正案を提示する (§4.)。最後に、この手法の妥当性について私見を示し、今後の課題と展開について述べる (§5.)。

2. 形式の段階付けの概観

2.1. 形式の段階付けとは

岡崎調査は、敬語行動や敬語に関する知識・意見・内省等を尋ねる面接調査、被調査者の経歴や職業といった社会的属性等を調べる社会生活調査(留置式)、自然な談話資料を収集する「対話の実験的調査」等、数多くの調査群から成る。その中で、岡崎調査の「柱」と位置付けられているのが、面接調査である。

その面接調査の中で、登場人物や状況を設定し、その場面・状況を描いた絵(刺激図と呼ぶ)を見せ、そのときに被調査者がどのような発話をするかを問う質問がある。例えば、東京の町角で通りすがりの20~30代の男性に国会議事堂の道を尋ねる、小さな子を連れてバスに乗っていると学生(男性)が席を譲ってくれたが、すぐ次で降りるので断る、などである。第一次調査から第三次調査まで、若干の増減はあるものの、12の場面が共通しており、半世紀にわたる敬語使用の変化をみることができる。

そこで得られた回答(反応文と呼ぶ)を、丁寧さの観点から段階をつけ、数値化したものが「形式の段階付け」である。その意義と方法は、概略次のようにまとめられる(国立国語研究所1958:154-5の要約)。

(A) なぜ段階付けするのか

得られた1つ1つの敬語形式を「丁寧さ」によって数値化するため。

(B) どのように段階付けするか

(B-1) 丁寧さは主観的なものであるが、それを客観的なものとして裏付け、決定する。

(B-2) 敬語を使用する人が、その主観を決定するものには、場面・雰囲気・言語形式等がある。その中で、言語形式が最も確実な手がかりになると考える。

(B-3) 言語形式には、音声・イントネーション・速度等もあるが、最も客観化しやすいと考えられる語形を材料とする。

(C) どのように客観性を保証するのか

反応文を判断する「基準」が、一般の人々の「基準」と合っているかを調査によって検証する。

実際に段階を付けていく作業は、第一次調査・第二次調査ともに、野元菊雄が担当した。この手法が「野元評定」と呼ばれる所以である。2度の段階付けは、国立国語研究所の職員が反応文を読み上げ、それに野元菊雄が「基準」に合わせて段階を付けていった。

次項で、段階付けに利用された具体的な「基準」をみることにする。

2.2. 段階付けの「基準」

第一次調査では、丁寧さの度合いとして、3つの段階を設定した。この「3段階方式」は、「段階1」が最も丁寧で、「段階3」が最もぞんざいとなる。「3段階方式」は、第二次調査でも採用されている。

判定に際し、文末部に注目し、その他の部分をも参考にして(国立国語研究所 1983:62)、以下のような「基準」を設けた。

<3段階方式の基準>

段階1

- (…) デゴザイマス, (…シテ) イタダキマス, (…シテ) クダサイマセ, イラシテクダサイ, イラッシャイマセ, のように, 大体二つの高い敬語形式の結合から成るもの。およびそれより丁寧な形。

段階2

- …デス, …マス, (…シテ) クダサイ, イラッシャイ, のように, 「です・ます調」や一つの高い敬語形式から成るもの。

段階3

- …ダ, …ヨ, …シテ (依頼), …シロ, 言い捨て (例えば「電報用紙!」), のように, 高い敬語形式がないとみられるもの。およびそれよりさらに乱暴な形。
- …シテクレ, …シテモラオウ, のように, 簡単な頼む言い方や, オクレ, オイデ, … (シ) ナサイ, のように目下などにしか使わない言語形式。

第二次調査では、上記の3段階方式に加えて、5段階方式による段階付けも行っている。

当初は、3段階方式の段階2を上・中・下に分けて5段階とする方針をとったが(野元 1978)、後にこれを改めて新しい5つの段階を定めた。その「基準」は次の通りである。

<5段階方式の基準>

段階1

- 「～(デ)ゴザイマス」のあるもの。
 - ◆ ただし、「ゴザイマス」があっても、「アリガトウゴザイマス」のように習慣化したものはとらない。
 - ◆ また、「ゴザイマス」があっても他に「デス」「マス」がなくて乱暴と思われるものは段階2以下とする。
- 「デス」と「マス」とが重なってあるもの。
- 「オソレイリマスガ」「スミマセンガ」につづけて「イタダク+マス」などがあるもの。
- 「オ～ニナル」に「デス」「マス」「イタダク」「イラッシャル」などが続くもの。
- 「オ～デハナイデスカ」「オ～クダサイマセンカ」など。

段階2

- 「オソレイリマスガ」「スミマセンガ」などなくて「イタダク+マス」などがあるもの。

- ◆ ただし、25 モーラ以下のものは段階 3 とする。
- なお、段階 1 およびここでいう「オソレイリマスガ」は「オ～シマスガ」を含む。
- 「オソレイリマスガ」に「クダサル」「ネガウ」「モラウ」「ヨロシイ」などが続き、さらに「デス」「マス」がつくもの。
- また「スママセン」に上のものがついて「デス」「マス」がつくもの。
- ◆ ただし、この場合は 30 モーラ以下は段階 3。
- 「～テオ～ニナル」「～テオラレル」「～テイラッシャル」「～テイカレル」などに「デス」「マス」のつくもの。
- 「オ～ニナッテクダサイ」。
- ◆ ただし、他の点で丁寧なら段階 1 にする。
- 「～ナサッタ」「～レル・ラレル」に「デス」「マス」がついたもの。
- 「～テクダサイマセンカ」「マイリマス」「オ～イタス」など。
- 「モウシアゲマス」は他に丁寧なところがなければ段階 3。
- 「ワタクシ」を使ったもの。

段階 3

- 「スママセン」に「クレル」「ホシイ」「モラウ」が続き、「デス」「マス」がつくもの。
- 「スママセン」の次に「クダサイ」がつくもの。
- ◆ ただし、30 モーラ以下は段階 4。
- 「オ～シタ」「デス」「マス」が前にあって、「クダサイ」「イタダキマス」「オネガイシマス」「タノミマス」などがつくもの。
- 「オ～デス」「オ～マス」「オ～クダサイ」「オ～デキマスカ」「オ～ネガイマス」「イタシマス」など。
- 「デス」「マス」が 1 回でも、「～デ」「～ケド」「～カラ」「～ガ」があるもの。
- ◆ ただし、15 モーラ以下の短いものは段階 4。
- 「デス」「マス」が離れて二つ以上あるもので、他にプラスの材料のないもの。
- 「ヨロシイデショウカ」「ドチラデショウカ」など。

段階 4

- 「デス」「マス」一つだけで、上の段階 3 以上に入らないもの。
- 「クダサイ」「チョウダイ」の他「デス」「マス」のないもの。
- 「デス」「マス」がなくても 50 モーラ以上のもの。
- 「スママセン」だけで他のプラスの材料がないもの。
- 「ネガイタイ」「モライタイ」などで終わっていても、その前に「デス」「マス」があるもの。
- 「～ジャンイカシラ」「オ～ナサイ」「ヨカッタラドウゾ」など。
- 「レル・ラレル」「オ～」があり、「デス」「マス」がないもの。

段階 5

- 「デス」「マス」がないもの。「～カシラ」「～シテ」「～ナサイ」があっても段階 5。
- 「デス」「マス」が一つだけで、あと「ホシイ」などで終わるもの。
- 「スママセンケド」「ワルイケド」などで始まっても「もらえる」などのところに「デス」「マス」がないもの。

ここで用語を整理しておこう。「基準」についてである。本レジュメでは、「基準」のようにカギ括弧付きでそれを表記してきた。これ以降は、上記の「～（デ）ゴザイマスのあるもの」「スミマセンの次にクダサイがつくもの」といった、具体的に判定の根拠となるものを**基準**とし、それを総合した尺度のことを**クライテリア**と呼んで区別する。

3段階方式では、中間に位置する段階2に分布が集中したため、そのクライテリアがやや荒い（国立国語研究所 1983：60）といった問題意識を受けて、新たに5段階方式を作成したのである。以下では、新たに構築された5段階方式について論を進めていく。そのうえで、まず5段階方式による段階付けが解決すべき課題を示し、その解決策を提示することにする。

3. 解決すべき課題

3.1. 課題のありか

既に述べたように、形式の段階付けは「丁寧さ」という主観的なものを、客観的に捉えることを目指した手法である。つまり、科学的な手法を目指している。科学を科学たらしめるもの、それは、追試可能性が保証されているということに他ならない。言い換えれば、誰がやっても同じ結果が出なければならないということである。

そのために、形式の段階付けという「丁寧さ」判定の手法は、次のふたつの課題を解決しなければならないと考えられる。

(1) 基準の明晰性と透明性の確保

具体的な基準を明示し、明確で、透明性のあるクライテリアを示すこと。

(2) 基準の客観性の確保

ある特定の研究者の主観による判定ではなく、人々の主観の総体（あるいは平均値）によって、客観性を確保すること。

(1) (2) のそれぞれについて、もう少し具体的に述べておこう。

(1) は、§2.2.で提示した基準をさらに明確で透明性のあるものにしなければならないということである。§2.2.で提示した基準は、すべての場面（＝質問項目）に共通したものである。実際の段階付けにあたっては、「さらに場面ごとの規則をこれらに準じてきめた」とされている（国立国語研究所 1983：64）。しかしながら、その場面ごとの規則（＝基準）は、当該の報告書のみならず、過去の如何なる資料にも見出すことができない。

今、§2.2.で示した基準を、場面に共通した基準ということで**場面共通ルール**と名付ける。そして、場面共通ルールに準ずる場面ごとの基準を**個別ルール**と呼んで区別する。各場面での基準の総体が個別ルールであり、個別ルールから共通項を取り出したものが場面共通ルールということである。また、それらを総称してクライテリアが形成されていると考える。

この個別ルールの明晰性・透明性を確保して示すことが、(1) の課題を解決することになる。その個別ルールを §3.2.で示すことにする。

(2) は、クライテリアを作る際の手順に関わる。実は、この点は第一次調査の結果を受けて作成された3段階方式において、後に述べる方法によって解決をみている。ただし、

第二次調査時の 5 段階方式については、同じ解決法をとったうえで作成していないという問題点もある。逆に言えば、5 段階方式についても、3 段階方式と同じ解決法を用いることで、客観性を確保した方法になるということもできる。この点については、§ 3.3. で述べる。

3.2. 個別ルールの再構築

第一次調査から第三次調査までに共通した場面は 12 場面である。そのすべてを取り上げることが困難であるから、ここでは、1 つの場面に絞って検討を進める。質問番号 105 番の「先生」場面と呼ばれる質問である。

「先生」場面の質問文、刺激図（提示した絵）、反応文の一部を以下に掲げる。

質問文（第一次調査・第二次調査）

この子はあなたのお宅のお子さん（弟さん、お孫さん etc）です。あなたが、このお子さんをつれて歩いていると、この人に会いました。この人は、昔あなたが小学校で習った先生です。先生に、「この子は？」とお子さんのことを聞かれたら、あなたは何と答えますか。

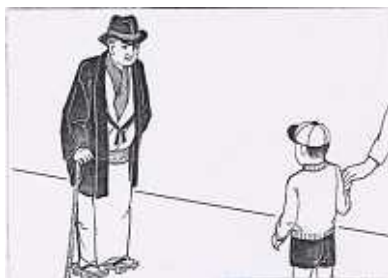
質問文（第三次調査）

この子はあなたのお宅のお子さん<弟さん、お孫さん etc>です。このお子さんをつれて歩いていると、この人に会いました。この人は、昔あなたが小学校で習った先生です。先生に、「この子は？」とお子さんのことを聞かれたら、何と答えますか。

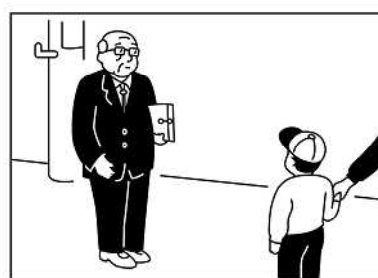
刺激図（提示した絵）



第一次調査
1953



第二次調査
1972



第三次調査
2008

反応文（被調査者 No. の若い順に、第一次調査～第三次調査の反応文を 3 つずつ挙げる）

- ① コレ ワタシノ イチバン ウエノ コデス
- ② ワタシノ コドモナンデス
- ③ ワタクシノ オトートデス

（以上、第一次調査）

- ④ ウチノ セガレデス
- ⑤ アノー ワタシノ コドモデス
- ⑥ コレワ ウチノ チョーナンデス (以上, 第二次調査)

- ⑦ コレワ マゴデス
- ⑧ ウチノ マゴデス
- ⑨ オヒサシブリデス ワタシノ アノ ムスコデス (以上, 第三次調査)

既に述べたように、5段階方式は第二次調査で採用された方式であり、場面共通ルールは示されているものの (§2.2.)、個別ルールは管見の限り報告書および過去の資料にも見出すことができない。それでは、どのようにして明晰性・透明性を確保した個別ルールを示すことができるだろうか。ここでは、やや変則的ではあるが、5段階方式で段階付けされた反応文と段階から、その段階を算出する際に適用した基準をあぶり出すという方法で、「先生」場面の個別ルールを再構築する。つまり、第二次調査の反応文(400文)と付けられた段階の関係を1つ1つ検討していき、どのような基準を盛り込んだのか、また盛り込まれた基準群はどのような強弱関係をもっていたのかを探る作業をするわけである。このことは同時に、過去の5段階方式による段階付けが、一つの定まったクライテリアによって算出されたものであるか否かを確認することにもなる。算出にあたって、クライテリアの活用にブレがあったのだとしたら、明確なルールをあぶり出すことはできないと考えられるからである。

この作業によってあぶり出した「先生」場面の個別ルールを下図に示す。

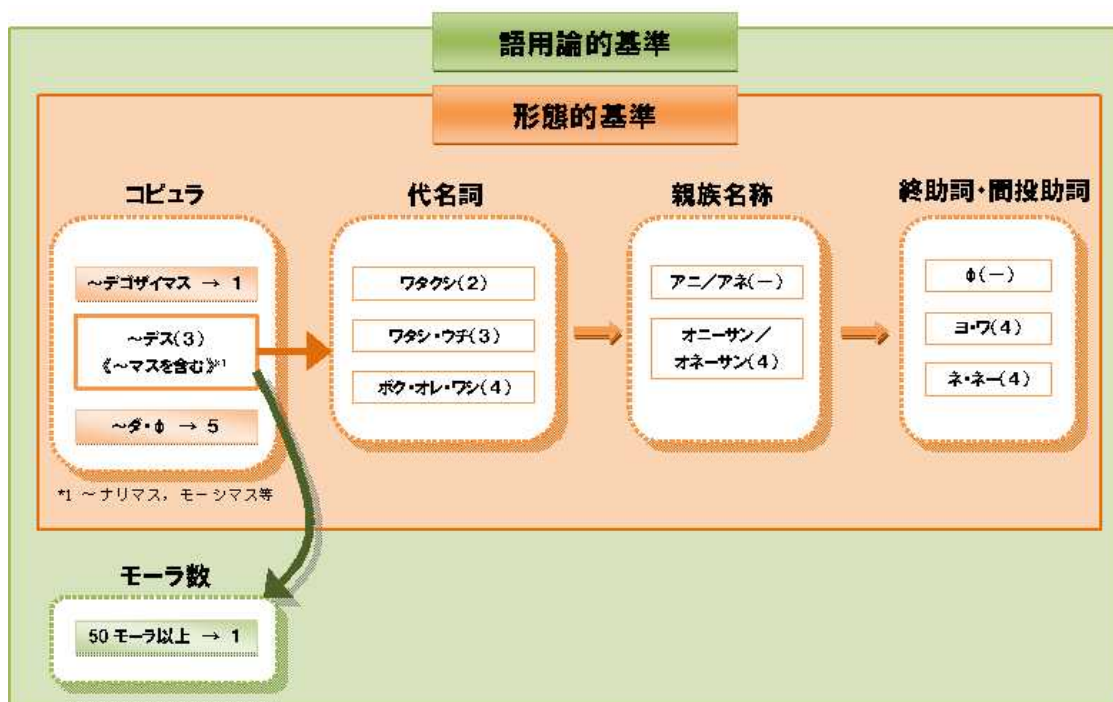


図1 「先生」場面の個別ルール

「先生」場面の個別ルールを示した上図について、説明を加える。

まず、個別ルールは、語用論的基準と形態的基準に分かれる。語用論的基準は、形態的基準を包含する。形態的基準で算出される段階を帳消しにして、別の段階を与えることができるからである（ただし、「先生」場面については、ある特定の形態（～デス）を含む反応文が 50 モーラ以上である場合という一つの基準のみである。この点は、他の場面の個別ルールをも意識した構成となっている）。「長い発話ほど丁寧」「短い発話ほどぞんざい」と意識されることを受けた基準であるため、語用論的な尺度といえることができる。

次に、形態的基準は、コピュラ、代名詞、親族名称、終助詞・間投助詞の順にフローチャート式に進むことによって段階が決定される。図で網掛けしてあるもの（～デゴザイマス、～ダ・φ）は、その形態が使われた時点で段階が決定することを意味する。したがって、初めに勘案されるコピュラについては、「～デゴザイマス」があれば段階 1、「ダ」が使用される、あるいはコピュラがない場合（=φ）は段階 5 が決定する。

このとき、「～デス」が含まれた発話は、段階 3 のポテンシャルを持ちながらも、まだ最終決定されない。次の代名詞で何が使われているかに進むことになる。代名詞で、「ワタシ」や「ウチ」が使用されていれば、そのまま段階 3 のポテンシャルを保持することになり、「ワタクシ」が使用されていれば段階 2 のポテンシャルを持った文に昇格し、「ボク・オレ・ワシ」が使用されていれば段階 4 のポテンシャルを持った文に降格する。

そして、次の親族名称に進む。「アニ」「アネ」が使用されていれば、ひとつ前の代名詞で決まったポテンシャルを維持することになり（図では－で示している）、「オニーサン」「オネーサン」ならば段階 4 のポテンシャルを持つことになる。このとき、フローチャートの後ろ（右側）に位置する要素が優先されるため、代名詞で段階 2 に昇格した文も、この親族名称で一気に段階 4 に降格することもある。

最後に、終助詞・間投助詞である。何も使われていなければ（=φ）、親族名称から移動してきたときの段階がそのまま最終的な段階となる。また、「ヨ」「ワ」「ネ」「ネー」といった終助詞や間投助詞が使用されている場合は、最終的な段階として段階 4 が求められる。

なお、このルール中に入らない形態は、「先生」場面の個別ルールを決定する要素となっていない。

この個別ルールを用いれば、誰でも、第二次調査の 5 段階方式の段階付けと同じ段階を算出することができる。このことは、次の 3 点を示唆していると言ってよい。

(ア) 基準の明晰性・透明性を確保できること

§ 3.1. で挙げた課題のうち、「(1) 基準の明晰性と透明性の確保」が保証される。

(イ) この段階付けの作業が、定まったクライテリアによっていたと考えられること

段階の算出にあたってのクライテリアが、算出の度にブレていたのならば、上記のような明確なルールをあぶり出すことはできなかったと考えられるからである。

(ウ) 第二次調査以外のデータ、つまり第一次調査と第三次調査の反応文についても同様の方法で段階付けを実施し、3 度の結果を比較することができること

しかしながら、上で見た個別ルールが科学的であると証明されたとしても、現代の敬語（丁寧さ）をみるクライテリアとして相応しいか否かは別問題であると認識しなければな

らない。このことは、次項でみる客観性を確保することと併せて議論する。

3.3. 主観の客観化

主観的である「丁寧さ」を客観的なものとして裏付けること、このことに、第一次調査の計画・実施・分析にあたった研究者たち（特に柴田武，野元菊雄）は尽力した。その手法を考え、実験し、実験結果から得られた結果をもって手法を修正し、調査というかたちに展開して解を求めた。それは、言うまでもなく、次のような問題意識を持っていたからである。

「ある基準」が、一般人の基準と合っていたかどうかの問題である。敬語がいろいろの点で問題になるのは、実際生活上で一般人の基準ではそれがどう判断されるかによってである。数人の学者の、多分に主観的な判断で、この調査の集計上最も基礎的なこの点数が決められるのでは、その判断が一般人の基準と狂っていない、という保証がないばかりか、もし狂っていれば、調査の結果全般が無意味なものになる。
(国立国語研究所 1958 : 155)

この手法を客観的なものとするために、第一次調査では、次のようなプロセスで段階付けを行った。

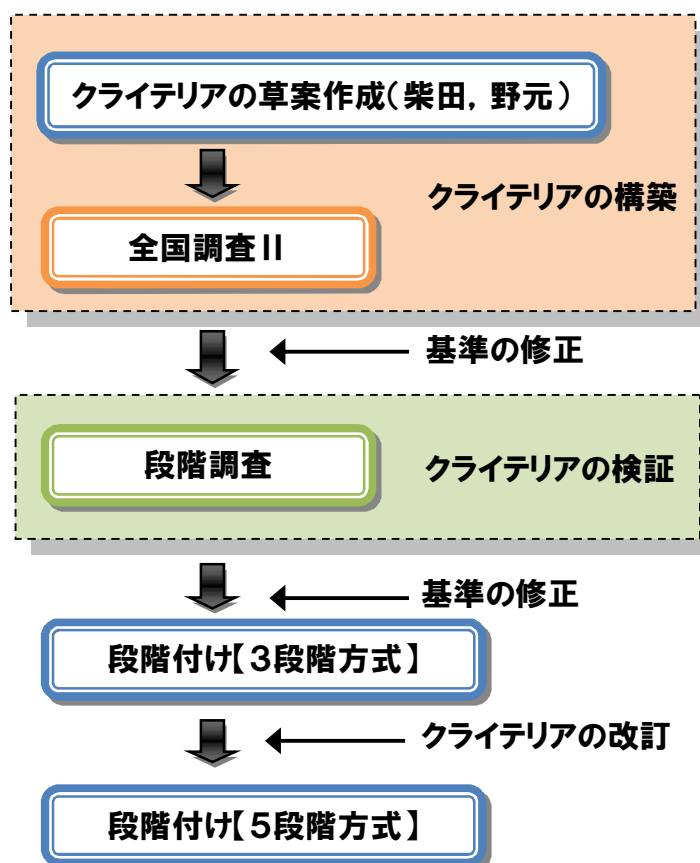


図2 クライテリアの構築・検証プロセス

まず、段階付けのクライテリアの草案を、柴田武、野元菊雄が作成した。そして、岡崎調査の前年に実施された伊賀上野における「上野調査」（岡崎調査の準備調査と位置付けられる）の面接調査と同様の調査を、1953年に全国で実施したのである。上野、岡崎の結果が、日本の中でどのように位置付けられるかを探るためである（詳しくは国立国語研究所1958を参照されたい）。東京と沖縄を除く47府県（北海道と兵庫県が2地点）で、863名から回答を得た。このとき、面接調査の調査員となったのが国立国語研究所の地方調査員である。地方調査員には事前にクライテリアの草案を渡しておき（昭和28年度『委託調査実施要領』）、東京で研修（地方調査員全国協議会）を行って、それぞれが担当した地点の回答（＝反応文）を3段階方式で段階付けさせた。この地方調査員が付けた日本全国の段階を基に、クライテリアの中身である基準を修正する。これは、研究者による「クライテリアの構築」過程とみることができる。

次に行ったのは、研究者ではなく、一般の人々の主観を取り込むという作業である。

調査は、反応文が書かれたカードを準備し、それをていねいだと思順に並べ替えてもらうというものである。この調査は複数の小調査群から成る。246枚（第一次調査の本グループと呼ばれるインフォーマント）のカードをすべて1人で並べてもらうもの、カードの枚数を絞り、判定者の性・年齢の構成を考慮したもの、やはりカードの枚数を絞り、同じ判定者に1ヶ月の間隔をおいて調査したもの等である。この小調査群の総称を「段階調査」と呼ぶ。この調査の結果を受けて、再度基準を修正し、クライテリアを整備して段階付けの作業にあたったのである。これは、研究者がたてたクライテリアが一般の主観と一致しているか否かを検証するためである。また、その主観を集め、総体（あるいは平均値）をもって、客観的なものに修正するためでもある。「クライテリアの検証」過程と呼ぶことができる。

上図でみたプロセスは、この段階付けという手法を再検討するにあたって、極めて重要なことを示唆している。すなわち、現代の敬語（丁寧さ）を段階付けするにあたって、そのクライテリアと一般の主観（の総体／平均値）との相違を見極め、後者の基準を取り込む（修正する）ことで、客観性を確保できるということである。また、そうしなければならぬとも言える。

この客観化のための作業は、上図と同様に、クライテリアの構築から始めることもできる。しかし、既にあるクライテリア（つまり第二次調査における5段階方式）について、検証する（つまり段階調査を実施する）ことによって修正することもできる。この作業によって、クライテリアの客観性の確保とともに、現代に合ったクライテリアの構築が可能になるのである。

以上の理由から、再度段階調査（実験）を実施した。次節では、その結果を示すとともに、その結果を受けた5段階方式の修正案（暫定版）を示す。

4. 段階実験

既に述べたように、3段階方式の段階調査は小調査群から成る。それぞれが個別の目的を持つとともに、何度も修正を加えながら検証を重ねていったからである。

一般の主観を客観化するための調査、つまり段階調査は、本来であればその地域言語が使われる地点、すなわち岡崎市ですべき調査である。しかしながら、数多くの小調査群を、修正を加えながら現地で行うことには困難が伴う。そこで、第一次調査では、現地岡崎市での段階調査に加えて、東京での段階調査も適宜実施していくことで検証を進めた。

今回の5段階方式についての調査は、本格的な段階調査にむけた実験的なものと位置づけることができる。そこで、実施にあたっては東京での実査ということにした。また、インフォーマントの数、年齢・性の構成には配慮しながらも、必ずしも属性の構成を網羅したものとはなっていない。その意味で、段階調査の第一次プリテストという性格が強いことから、「段階実験」と呼んでおく。

調査は2種ある。ひとつは、かつての段階調査と同じ方法で行った調査である。いまひとつは、かつての方法を踏襲しながらも、今回新たに企画した調査である。それぞれを § 4.1.と § 4.2.でみていく。

4.1. 基準抽出の段階実験（コピュラ）

かつての段階調査のうち、一般の主観を集めるための基礎的な調査と位置づけることのできるものがある。東京において、カード化した反応文（15枚）を並べてもらい、コピュラと敬語の関わりをみるという調査である（国立国語研究所 1958:159-164）。段階調査は、東京においても複数の調査を実施しているので、ここでは便宜的に東京とコピュラ（copula）の頭文字をとって「TC 段階調査」と呼んでおく。今回の実験は「TC 段階実験」と呼んでおこう。今回の TC 段階実験では、7名に対して実験を実施し、並び替えの後に簡単なフォローアップ・インタビューも行った。

実験で使用した反応文を以下に提示する。なお、反応文の前に付いている番号は、第一次調査のインフォーマント番号である。つまり、実際に回答された反応文ということである。ただし、500番は当時の調査と同様に、尺度として創作されたカードである。506から501の順にしていねいになるようにしてある。以下に示した反応文の配列は、第一次調査時のインフォーマントの平均値といえる順番である。

- ① 506 コレワ ワタクシノ コドモデゴザイマス
- ② 505 ワタシノ コドモデゴザイマス
- ③ 179 コドモデゴザイマス
- ④ 72 ワタクシノ コドモデアリマス
- ⑤ 504 コレ ワタクシノ コドモデス
- ⑥ 224 ワタクシノ コドモデス
- ⑦ 164 コノコワ ワタシノ コドモデス
- ⑧ 98 コノコワ ワタシノ コドモデスケド
- ⑨ 145 コレ ワタシノ コドモデス
- ⑩ 503 ワタシノ コドモデス
- ⑪ 206 アタシノ コドモデス
- ⑫ 235 ウチノ コドモデス

- ⑬ 502 コドモデス
- ⑭ 208 ワタシノ コドモ
- ⑮ 501 ワタシノ コドモダ

TC 段階実験は、50代2名、30代3名、20代2名に対して行った。各年代から1名分を代表させて、その結果を表1に掲げる。

表1 TC 段階実験の結果（3名分）

	50代	30代	20代
	女性	女性	男性
1	①	①	①
2	②	②	②
3	③	③	③
4	④	④	④
5	⑥	⑤	⑦
6	⑤	⑥	⑤
7	⑧	⑧	⑥
8	⑦	⑦	⑨
9	⑫	⑨	⑩
10	⑩	⑩	⑪
11	⑨	⑫	⑫
12	⑬	⑪	⑬
13	⑪	⑬	⑧
14	⑮	⑮	⑮
15	⑭	⑭	⑭

表1で青い網掛けを施した部分は、インフォーマントに共通している部分である。これは、この3名に限ったことではない。第1位～第3位および第14位と第15位の位置から分かることは、並べ替えの基準として、「～デゴザイマス」を使った反応文を丁寧だと判断し、逆に「ダ」もしくはコピュラなしを丁寧でないと考えていることである。また、第5位～第13位の間には、コピュラに「～デス」を使用した反応文が並ぶわけであるが、その判定結果はインフォーマントによって若干の異なりが見られる。つまり、§3.2.で示したかつての個別ルールのうち、コピュラに関する基準、すなわち「～デゴザイマスがあれば丁寧、～ダ・φはぞんざい、～デスの場合その間になるが、他の要素によって丁寧さの順位が決まる」という基準は、現代でも変容していないと解釈することができる。

表1の3名について、かつてと同様にスピアマンの順位相関係数を求めた結果が表2である。

表2 TC 段階実験の順位相関係数

判定者	順位相関係数
50F×30F	0.95
50F×20M	0.94
30F×20M	0.92

並べ替えたカード数が少ないにも関わらず、非常に高い値が出ている。インフォーマント全員の平均値も、TC 段階調査の 0.819 より高い 0.8619 となった。また、最低値も TC 段階調査の 0.5 に比べて 0.68 と高く、十分に高い相関を示しめしていると言える。さらに、分散の値も 0.005 と極めて小さい。以上から、第一次調査の TC 段階調査と同様に、インフォーマントによる違いは大きくないと結論付けて良さそうである。

しかしながら、表 1 で橙色の網掛けを施した部分、つまり⑧「コノコワ ワタシノ コドモデスケド」の順位が、50 代女性・30 代女性と 20 代男性の間で異なっている。これは性差によるものではない。20 代・30 代のインフォーマントの多くは、このように⑧を低く判定しているのである。実験を重ねる中で、⑧に関わる基準には順位相関では認められない年齢差があるのではないかと考えた。

⑧と関連する反応文として、⑦がある。⑦と⑧の違いは、最後に接続助詞の「ケド」が付いているかどうか、である。比較的若い年齢層のインフォーマントは、「ケド」で終わる文、いわゆる中途終了型発話を丁寧さの低いものだと判定しているのである。このことは、並び替え作業の後で行ったフォローアップ・インタビューでも確認された。

フォローアップ・インタビューの結果から、もうひとつ注目されることがある。それは、性・年齢を問わず、すべてのインフォーマントが「コノコワとコレワの違いを強く意識した」と内省したことである。かつての基準にはない、自分の子供（あるいは孫や弟）をどのように指すかという指示表現が、現代の敬語をみつめる基準（「先生」場面の個別ルール）には必要となる可能性を示唆している。しかしながら、この TC 段階実験は、その点を検証する反応文を用意しておらず、結論を出すことができない。

以上の TC 段階実験の結果から、次に検証すべき課題がみえてくる。次の 3 点である。

(a) コピュラ以外の検証

かつての個別ルール (§ 3.2.) で盛り込まれていたコピュラ以外の基準、すなわち代名詞、親族名称、終助詞・間投助詞の基準が、現代でも有効なものなのか、またその基準の強弱が変わっていないか(=フローチャートの順番が変わらないか)を検証する。

(b) 中途終了型発話に関する検証

若い年層は、丁寧さを判断する基準として、中途終了型発話に注目している可能性がある。このことを検証する。

(c) 指示表現に関する検証

フォローアップ・インタビューで内省された指示表現の違いが、丁寧さの判定に関わっているか否かを検証する。

上記 3 点を検証するために、新たな検証実験を行った。次項では、その実験の結果を示し、現段階での「先生」場面の個別ルール（暫定版）を示す。

4.2. 基準抽出の段階実験（コンピュータ以外）

前項の (a) ~ (c) を検証するために、かつての段階調査にはない新たな実験を行った。この実験は、§4.1.の TC 段階実験の結果と合わせることで、研究者ではない一般の人々の「基準」を抽出することになる。東京で実施した基準を抽出 (extract) する実験ということで、TE 段階実験と呼んでおく。

TE 段階実験の目的は、(a) ~ (c) を確認すること、すなわち、かつての基準に盛り込まれていたコンピュータ以外の基準である①代名詞、②親族名称、③終助詞・間投助詞、TC 段階実験で若い年層の判定に強い関わりのあった④中途終了型発話、TC 段階実験のフォローアップ・インタビューの結果から、すべてのインフォーマントが判定の際に意識した⑤指示表現の5つの関係をみることにある。

この①~⑤の要素をかけあわせた文をつくと、36通りの文ができる¹。TE 段階実験に使用した36文は以下の通りである。なお、文の右側にある数字は、かつての5段階方式の基準で段階付けした場合の段階数である。

1	コノコワ ワタクシノ アニノ コドモデスケド	2
2	コノコワ ワタクシノ アニノ コドモデス	2
3	コレワ ワタクシノ アニノ コドモデスケド	2
4	コレワ ワタクシノ アニノ コドモデス	2
5	コノコワ ワタシノ アニノ コドモデスケド	3
6	コノコワ ワタシノ アニノ コドモデス	3
7	コレワ ワタシノ アニノ コドモデスケド	3
8	コレワ ワタシノ アニノ コドモデス	3
9	コノコワ ワタクシノ オニーサンノ コドモデスケド	4
10	コノコワ ワタクシノ オニーサンノ コドモデス	4
11	コレワ ワタクシノ オニーサンノ コドモデスケド	4
12	コレワ ワタクシノ オニーサンノ コドモデス	4
13	コノコワ ワタクシノ アニノ コドモデスヨ	4
14	コノコワ ワタクシノ オニーサンノ コドモデスヨ	4
15	コノコワ ワタシノ アニノ コドモデスヨ	4
16	コノコワ ワタシノ オニーサンノ コドモデスケド	4
17	コノコワ ワタシノ オニーサンノ コドモデス	4
18	コノコワ ワタシノ オニーサンノ コドモデスヨ	4
19	コノコワ ボクノ アニノ コドモデスケド	4
20	コノコワ ボクノ アニノ コドモデス	4
21	コノコワ ボクノ アニノ コドモデスヨ	4
22	コノコワ ボクノ オニーサンノ コドモデスケド	4
23	コノコワ ボクノ オニーサンノ コドモデス	4
24	コノコワ ボクノ オニーサンノ コドモデスヨ	4
25	コレワ ワタクシノ アニノ コドモデスヨ	4
26	コレワ ワタクシノ オニーサンノ コドモデスヨ	4
27	コレワ ワタシノ アニノ コドモデスヨ	4
28	コレワ ワタシノ オニーサンノ コドモデスケド	4
29	コレワ ワタシノ オニーサンノ コドモデス	4

¹ 「コレワ ワタシノ アニノ コドモデスケドヨ」のような非文法的な文を除いた数である。

30	コレワ	ワタシノ	オニーサンノ	コドモデスヨ	4
31	コレワ	ボクノ	アニノ	コドモデスケド	4
32	コレワ	ボクノ	アニノ	コドモデス	4
33	コレワ	ボクノ	アニノ	コドモデスヨ	4
34	コレワ	ボクノ	オニーサンノ	コドモデスケド	4
35	コレワ	ボクノ	オニーサンノ	コドモデス	4
36	コレワ	ボクノ	オニーサンノ	コドモデスヨ	4

実験にあたっては、上記の 36 文を記した 36 枚のカードを準備し、それを同じくらいの丁寧さをもったグループに分けてもらうという方法をとった。このとき、分けるグループの数は不問とした。また、グループ分けの後、フォローアップ・インタビューも行っている。

この分けられたグループの関係を検討することによって、§3.2.と同様に、そのインフォーマントが丁寧さを判断する際の基準をあぶり出すことができる。TC 段階実験の結果を示した 3 名は、TC 段階実験では多少の異なりが認められた。他のインフォーマントについても、「～デス」が使われた文の順位は多少異なっていた。しかしながら、この TE 段階実験の結果はすべてのインフォーマントが全く同じ回答を出した。

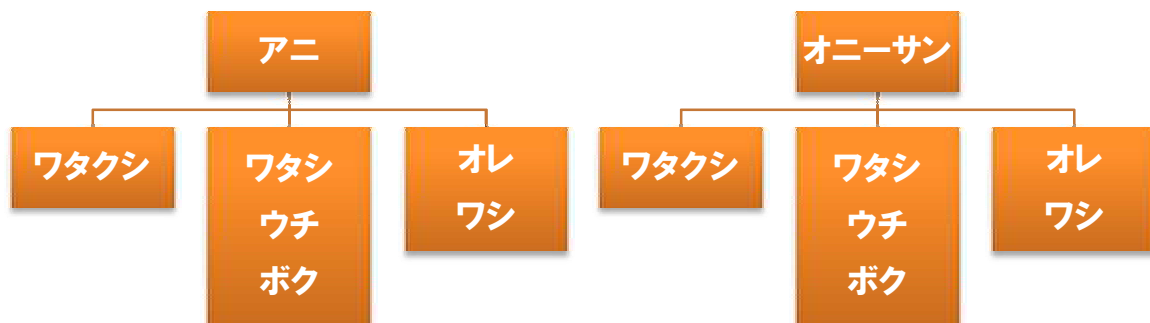


図 3 TE 段階実験のグルーピング結果

上図は、TE 段階実験でのインフォーマントのグルーピングを図示したものである。まず、大きく「アニ」を使ったグループと「オニーサン」を使ったグループに分かれる。次に、「アニ」「オニーサン」のグループは、それぞれ代名詞の「ワタクシ」を使ったグループ、「ワタシ」「ウチ」「ボク」を使ったグループ、「オレ」「ワシ」を使ったグループに分かれる。

この結果から、次のことが言える。(A)～(C)は§4.1.でみた検証すべき課題と対応している。

(A) コピュラ以外の検証

かつての基準のうち、終助詞・間投助詞は丁寧さを判定する基準とはなっていない。しかし、代名詞、親族名称は基準となっている。

(B) 中途終了型発話に関する検証

中途終了型発話は、5つの要素を盛り込んだ TE 段階実験では若年層にも重視されなかった。これは、中途終了型発話が丁寧さ判定の基準として働かないことを意味しているわけではない。グループを形成するほどの (=基準として個別ルー

ルに盛り込まれるほどの)「強さ」を持っていなかったのだと考えられる。

(C) 指示表現に関する検証

指示表現も丁寧さ判定の基準としては弱かったと考えられる。

さらに、過去の基準との差異については、次のことが言える。

(D) かつての基準で「オレ」「ワシ」と同グループだった「ボク」は、「ワタシ」「ウチ」と同じグループと意識される。

また、(A) の結果は、個別ルールに盛り込まれる基準の順序についても示唆している。

(E) 基準の強さとフローチャートでの順序

代名詞の「アニ」と「オニーサン」で大きなグループが形成されるということは、代名詞という基準が個別ルールの中で極めて強く働いていることを意味する。したがって、フローチャートでの位置は、後ろに置かれるということになる。この点はかつての個別ルールと同様である。

(A) ～ (E) の結果を踏まえ、§3.2.で示した「先生」場面の個別ルールを次のように修正する。

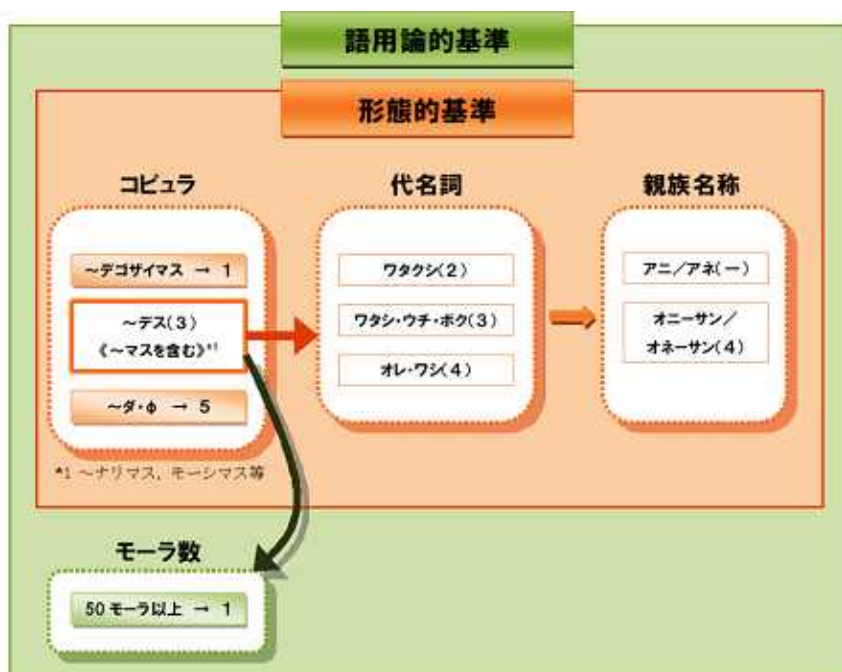


図4 「先生」場面の新個別ルール（暫定版）

図のように、かつての個別ルール (§3.2.) と異なるのは、終助詞・間投助詞に関わる基準がないこと、「ボク」が使った反応文が段階3のポテンシャルを持ったものになったことである。もちろん、この修正した個別ルールは、現段階での暫定版でしかない。この個別ルールが決定版となるには、段階実験を重ね、それを段階調査に展開して検討する必要があることは言うまでもない。本発表は、これまでの検証過程を示したわけである。今後の展開については、様々な議論を尽くしたうえで進めたい。それが本発表の目的でもある。その今後の展開について、現時点で考えることを次節でまとめ、発表を終える。

5. 今後の課題と展開

本発表は、過去 2 回の岡崎調査の中心的な分析手法であった「形式の段階付け」が、現代の敬語をみつめる手法と成り得るか否かを検討してきた。場面ごとに定められた個別ルールを示すことで、基準の明晰性・透明性を確保できることを示した。また、かつての基準の構築・検証のプロセスをみることで、客観性が確保されていたことも明らかにした。

すなわち、「形式の段階付け」は科学であることをみた。本発表が、基準、個別ルール、場面共通ルールの上位概念としてクライテリアという用語を使用したもの、この方法がガイドラインではなく、透明性・客観性が保証された判断基準であることを意図したからである。

この方法の検討は始まったばかりである。実験を重ね、検証し、修正していかなければならない。それと同時に、さらに検討すべき課題がある。この方法が科学であったとしても、敬語（ないし丁寧さ）をみる手法として妥当であるか否かということである。他の手法の方が有効であるかもしれないからである。しかしながら、その手法は、本発表でみたように基準やクライテリアが見えるものでなければならぬ。なぜなら、岡崎調査は、その基準やクライテリアをあぶり出すことを目的に企画され、半世紀という期間をかけてデータを収集してきた調査だからである。

さらに、語形以外の基準を盛り込んだクライテリアも課題となる。言語形式には、音声・イントネーション・速度等もある。それらの中に人々が丁寧さを判断する基準があるのだとしたら、それを取り込んで初めて「形式の段階付け」としての完成をみる。そして、言語形式以外の基準が丁寧さに関わっているのなら、それを取り込んで初めて「丁寧さの段階付け」という手法に発展することになる。まずは、言語形式全般の基準を取り込んだ「新形式の段階付け」の手法を構築し、提示する予定である。

なお、「新形式の段階付け」の構築と同時並行のかたちで、従来版と暫定版の個別ルールそれぞれで求めた段階得点の比較や、従来版・暫定版それぞれの第一次～第三次調査の結果比較を行っている。この分析・考察については、別の論考の機会を準備する。

参考文献

国立国語研究所（1958）『敬語と敬語意識』国立国語研究所報告 11

国立国語研究所（1983）『敬語と敬語意識 ー岡崎における 20 年前との比較ー』国立国語研究所報告 77

野元菊雄（1978）「敬語の段階」『日本語教育』35 号